

論文名：『ハムレット』のテキストにおけるパッセージの異同に関する研究（要約）

新潟大学大学院現代社会文化研究科

氏名 辻 照彦

『ハムレット』には、1603年に出版された **The First Quarto (Q1)**、1604年に出版された **The Second Quarto (Q2)**、そして1623年に出版された **The First Folio (F)** という3種類のテキストが存在する。本論では、**Q2** と **F** のテキスト間に見られるパッセージレベルの異同に注目し、代表的なパッセージについて、**Q1** も含めた3種類のテキストを詳細に比較分析することにより異同の特徴や発生メカニズムを明らかにしようとしている。そして、その結果に基づいて、パッセージの異同に関連して提唱されてきた、**F** テキストを **Q2** テキストのシェイクスピア自身による改訂版と見なす作者改訂説の妥当性を検証している。本論の前半では、**The Second Quarto** にのみ見られ **The First Folio** からは欠落している **Q2-only passage** を、後半では、**The First Folio** にのみ見られ **The Second Quarto** からは欠落している **F-only passage** を中心に扱っている。

第1章では3幕4場の **the 'engineer' passage** を扱っている。イングランドに送られることになったハムレットはこのパッセージの中で、学友二人がイングランドに同行することや、彼らが親書を携行することを語る。一部の批評家は、このパッセージの内容が5幕2場で語られる親書書き換えの説明と矛盾するために **F** から削除されたと主張している。本章では、このパッセージが5幕2場の説明と矛盾した内容にはなっておらず、むしろ親書書き換えのエピソードに不可欠な情報を観客に提供する機能を果たしていることを原話や **Q1** の展開と比較しながら論じている。

第2章では4幕4場の **Q2-only passage** を扱っている。4幕4場はフォーティンbrasがノルウェー軍を率いて行進する冒頭の場面を残して、ほとんどシーン全体が **F** からカットされている。本章では、このパッセージが劇全体の中で果たしているいくつかの機能のうち、特にハムレットがイングランドに向けてデンマークから出発したことを観客に最終確認させ、4幕5場のサスペンスをより高める機能が重要であることを、ハムレットの出国情報が王と妃の会話によって提供されている **Q1** の展開と比較しながら論じている。

第3章では、5幕2場の **Q2-only passage** であるロード・スピーチを扱っている。無名の貴族がレアティーズとのフェンシング・マッチについてハムレットに確認するロード・スピーチは、オズリックの話の繰り返すだけの無駄なスピーチとして、**F** からカットされていることを支持する批評家が多い。本章では、ロード・スピーチがオズリック退場後も曖昧なままになっている試合の時間と場所についてハムレットと観客に最終確認させた上で、観客をハムレットが死の予兆を感じるオーギュリ・スピーチへと導く重要なアプローチになっていることを、ロード・スピーチの一部がオズリックに相当する **Gentleman** の台詞に盛り込まれている **Q1** の展開と比較しながら論じている。

第4章では、2幕2場の1番目のF-only passageである‘Denmark’s a prison’ passageを扱っている。これは、ローゼンクランツとギルデンスターンがハムレットを訪問し、学友らしく冗談を交えて再会の挨拶を交わす場面である。Q2には‘but’で始まる文章が連続することに加えて、ハムレットが学友二人を疑い始めるきっかけが消失してしまう問題があることや、F-only passageとその前後のテキストの間にFortuneやbeggarに関するトピックの継続や表現上のエコーが見られることを明らかにしながら、‘Denmark’s a prison’ passageがFへの加筆ではなく、Q2からの欠落である可能性が高いことを論じている。

第5章では、2幕2場の2番目のF-only passageであるthe ‘little eyases’ passageを扱っている。これは、ローゼンクランツとギルデンスターンが最近のシティーにおける劇場事情をハムレットに説明する場面で、少年劇団への言及が見られる有名なパッセージである。the ‘little eyases’ passageで言及される劇場戦争を受けて、ハムレットが直後のコメントで新王クロードゥアスと先王ハムレットを持ち出して複雑なアナロジーを描き出していることや、このパッセージと前後のQ2/F共通部分には、役者と肖像画の微小さを強調するような表現上のエコーが見られることを明らかにしながら、the ‘little eyases’ passageがFへの加筆ではなく、Q2からの欠落である可能性が高いことを論じている。

第6章では、5幕2場のF-only passageである‘The interim’s mine’ passageを扱っている。これは、ハムレットがクロードゥアスへの復讐を再表明するスピーチを含む重要なパッセージである。Q2では2つの文章が不完全な状態で途切れてしまっていることや、このパッセージの中のハムレットとホレイシヨウの台詞は、少し離れたQ2/F共通部分にある彼らの台詞やアクションと有機的に関連していることを明らかにしながら、‘The interim’s mine’ passageがFへの加筆ではなく、Q2からの欠落である可能性が高いことを論じている。

第7章では、パッセージの異同に絡めて、FのレアティーズはQ2と比べてより尊敬に値する若者のように描かれているとするPaul Werstineの主張と、Fではハムレットと学友二人の友情関係がより強調されているとするJohn Kerriganの主張について検討している。劇の後半ではレアティーズの卑劣な復讐者としての側面が強調されていることと、2幕から4幕にかけて、ハムレットの学友二人に対する警戒心が強調されていることを明らかにしながら、作品全体から導き出せるレアティーズ像やハムレットと学友二人の関係はWerstineとKerriganが強調するほどQ2とFで異なっていないことを論じている。

最後に本論では、各章で示したQ2-only passageとF-only passageの分析結果を踏まえた上で、『ハムレット』の3つのF-only passageはQ2の基になったマニュスクリプトに含まれていたものが、印刷の段階で欠落した可能性が高いこと、Fからカットされている一部のパッセージには、上演準備に向けた予備的特徴が見られること、そして『ハムレット』のFバージョンをQ2バージョンのシェイクスピア自身による改訂版と見なす作者改訂説には、その妥当性に問題があることを結論として示している。